

2023. 3. 19. 主日礼拝説教  
聖書：ルカによる福音書18章35～43節  
『何をしてほしいのか』

人によって千差萬別なのでしょうが、わたしたちは恥をかくということが往々にしてあるものです。笑いで済む程度の軽いものから、ひんしゆくの極みに達する程のものまでさまざまなものをわたしたちは経験してきてしまっているわけです。それも恥の上塗りなどと揶揄されるように何度も同じような恥を繰り返すのです。ただし、恥をかいても何とも感じないようになれば、おそらく人間はおしまいなのだろうとも思います。恥を知らねばなりません。しかし、恥をかかずに生きて行ければそれで良いかという、実はそうでもないのです。

本日の聖書の箇所は「エリコの近くで盲人をいやす」という小標題から始められます。物語は極めて単純で誰にでも分かり易く書き始められてゆきます。ストーリーとしては、目の不自由な人がイエスの到来を聞きつけて、周囲の制止にもめげることなく「わたしを憐れんでくれ」と救済の要請を繰り返したというものです。そして、その結果としてイエスと対峙する時と場を獲得するのです。

福音書にはこの物語展開とそっくりな記事がひしめき合っています。ほぼすべてが病いや障がい、差別や不当な取り扱いからの救済要請です。それも「途中で・突然に」事は起こるのです。どちらかと言えばこういった予定外の闖入は迷惑な事だったはずですが、これらのたとえ話は初代教会がその働きの中で、「人が人と出会う」という出来事を最優先事項の一つとして選択していたということなのです。そして、そこにはいつもイエスの眼差しが注がれてゆくのです。

当時のユダヤ社会とは厳格な社会構造を構築していました。特に礼節をわきまえることには厳しかったといえます。約束もないまま人前で自分の願望を大声で繰り返すなどという行為は恥そのものであったといわれていました。このように、実は福音書には恥をかく人が次から次へと一杯登場して来るのです。

「これは、いったい何事ですか」(36)と彼は声をあげます。誰かが「ナザレのイエスのお通りだ」(37)と答えます。間髪を入れず彼は「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」(38,39)と叫びます。「ナザレのイエス」とは個人的領域として人を救うイエスを意味します。しかし、ここで目の不自由な人が用いる「ダビデの子イエス」とは、社会体制も含めた広範な意味での政治的・社会的救済を意味しているのです。それは「この要求を個人的な恥として受け取らないで、叫ばざるを得ない魂の希求として捉え直して欲しい」という強い要請なのです。

わたしたちは出来れば恥をかかずに生きようとしています。恥は人生につきものだけれども必要のないものと考えてなるだけ遠ざけることが人生の知恵のように思ってしまう。

けれども、真理というものは、そして、その真理に従って生きていこうとする者に対して、どれほど屈従に甘んじようとも従うことを要求するものなのです。ですから、恥をかかずに生きようとする者は、真理とか使命に生きることは本質的に無縁な者なのです。ただ自分や世間に流されているだけなのです。流されずに生きようとする者は、恥の持つ高貴さをわきまえなければならないのです。